アガペーとは何か知りたくて

豊田航志朗

２０１６年3月、母から渡された書き込み一つ無い聖書をキャリーケースに入れ、兄と牧師さんと共に人生初の飛行機に乗り込んだ。12 歳（小学校６年生の冬）の時だった。行き先はほほ笑みの国タイ。タイにある「アガペーハウス」というエイズ患者のための孤児院と「イムジャイハウス」という親をマフィア抗争によって亡くした子のための孤児院に行き、慈善活動をすることが目的だった。

兄と牧師さんの他には、教会でよく遊んでもらっていた大学生のお姉さん達3人と、牧師さんの弟さんがいた。

僕と兄はみんなに比べて信仰心はなかった。幼児洗礼は受けていたものの、教会は遊び場としか思っていなかったし、聖書も子ども用の絵本の聖書以外は読んだことすらなかった。参加した動機もいたって不純だ。「海外に行ってみたい！」ただそれだけだった。

タイに到着した初日は観光をしたが。2日目から僕たちは孤児院へと向かった。正直、不安しかなかったし、直前には行きたくないなとさえ思った。事前学習で孤児院の子どもたちの状況は聞いていたので、何か暗い雰囲気を想像していたし、子どもながらに責任も感じていた。自分には務まらないと思っていたし、言語的な問題もあった。できれば観光だけで帰りたかった。

現状は想像の正反対だった。歳の近い子どもたちが「コウチャン！ショーチャン！」と教わったばかりのカタコトの日本語で僕たちの名前を呼び、「レッツプレイサッカー」と元気に声をかけてきた。僕らも「メッシ！ネイマール！」とサッカー選手のモノマネをして孤児院の庭を走り回った。バレーボールをしたり川遊びをしたり、相撲をしたりとても楽しかったのを今でも鮮明に覚えている。友達が増えたような気持ちだった。彼らがエイズにかかっていること、親がいないことなどすっかり忘れていた。

ホテルで兄とこのような会話をした記憶がある。

「みんな同じなんやな兄ちゃん。日本もタイも。エイズだろうと親がいてもいなくても」

「みんな（同行したメンバー）は泣いたりしとったけど、可哀想って思う方がなんか違う気がするわ。」

今思えば、僕らは彼らが抱える闇に気づいていなかっただけかもしれないし、目を背けて

いただけかもしれない。しかし、これが僕らなりの本音だった。みんな平等だって聖書のどこかに書いてあった気がした。特別扱いし、憐れむのではなく、日本の友達と同じように接するのがアガペーだと思った。エイズだから親がいないから仲良くするのではなく、神様の下で生まれた同じ尊い存在だから仲良くしなきゃいけないと思った。

２０２４年10月、弟を連れて僕は人生2度目のタイに向かう。教会員にはならなかったが、自分の信仰に向き合いたくて大学では宗教学を専攻した。今度はメモと書き込みで覆われたボロボロの聖書と共に。8年経って大人になり何を学ぶだろうか。あの頃のように純粋でいられるのだろうか。本当に無条件に彼らを愛せるだろうか。